

国立音楽大学附属中学校入学試験問題

令和七年二月一日

国語

※解答はすべて解答用紙に記入すること。

一、次の①～⑩の——線について、漢字は読み方をひらがなで書き、カタカナは漢字に直しなさい。

- ① 険しい山道。
- ② 車窓からみえる景色。
- ③ 干潮の海。
- ④ 沿線マップを見て散歩する。
- ⑤ 奮起して勉強する。
- ⑥ キンカン楽器を吹く。
- ⑦ 磁石でサテツを集める。
- ⑧ ケイゴを正しく使う。
- ⑨ 川のリュウイキを調べる。
- ⑩ 行事をエンキする。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の関係で、一部省略している部分があります。)

突然ですが、質問です。

「人生や世の中って、辛いことが多いと思いますか？ 楽しいことが多いと思いますか？」

僕は、塾の卒業式で卒業していく学生たちによくこの質問をします。皆さんも考えてみてください。

実は会場で手を挙げてもらうと、毎年、「辛いことが多いと思う」と言う人がほとんどです。人生は楽しいことばかりだと言う人は、100人いたら2～3人くらいいません。

でも、僕がいつも不思議に思うのは、なぜまだ社会に出ていない学生が「世の中は大変だ」と思うのか、です。

会場では9割以上の人が「人生や世の中というのは辛いものだ」に手を挙げますが、彼らは学生として親に保護されていて、社会人としての経験はありません。ある意味で、世の中は辛いとか大変だと言える段階にはないはずですよ。まだ世の中を経験していないのですから。

それなのに、なぜ「人生や世の中は辛い」と思っているのでしょうか？

それは、周りの大人が皆、そう思っているからです。

ここが重要なポイントです。

周りが皆、「人生は辛いもの」とか「世の中は甘くない」と言っているから、それを聞いて育った人もそう思い込んでいる。自分ではほとんど経験していないのに。

それは親だけではありません。親戚や地域の大人たち、学校の先生、部活の指導者もそうでしょう。

そういう人たちも、子どもの頃から大人からそう聞いて育ってきているから、下請けのまた孫請けのような形で、「人生は辛いもの」「世の中は厳しいもの」という思想が根付いてしまっているのです。

最初に言っておきます。

誰かの言う「人生は辛いもの」「世の中は厳しいもの」は間違っています。

君たちはそんな言葉を信じてはいけません。

僕がそう言いきる理由は2つあります。

理由の1つ目は、君たちはまだ社会を経験しておらず、「人生は辛いもの」というのは伝聞情報でしかないということです。

自分自身で経験していないのですから、この段階ではまだ正しい情報とは言いませんよ。

理由の2つ目。そのように「人生は辛いもの」という情報を君たちに伝えた人たちは、釣った鯛をそのまま食べている「加工の下手な人たち」だからです。

何を言っているのかわかりませんよね。説明しましょう。

鯛という魚がありますね。刺身や煮つけや鯛茶漬けにしても美味しいし、おめでたい席では尾頭付きで出されます。魚が苦手な人

以外であまり嫌いという人は聞いたことがありませんが、では、鯛の刺身が好きだという人に、釣ったままのウロコがついた状態で

食べさせたら、相手は何というでしょう？

ぬるぬるしているし、ウロコは硬いし、これは美味しいとかぶりつく人はたぶんいないでしょう。

では、その鯛はどうしたら美味しくなるのかというと、切れ味のいい包丁でウロコをとり、皮をそいで、三枚などにおろして、身

を切ればいいのです。そこに美味しい塩や醤油、新鮮なワサビを付けたら、もっと美味しくなるでしょう。

A、それを素敵な夜景を見られる場所で好きな人と食べたなら、さらに美味しくなるでしょう。

何が言いたいかというと、人生が辛いとか大変だと言っている人というのは、こうした手間や工夫を省いて、生で食べている人だということですよ。

反対に、「鯛ってすごく美味しいよね」と言っている人は、適切な調理をして、美味しくなる工夫をして、好きな人たちと一緒に食べている人です。

手間をかけたたり工夫をしたりしない人が「人生は辛いもの」「世の中は厳しい」と言っているのです。こうした人の話を聞いても、何もいいことはありません。その人の人生が辛かったというだけでの話です。むしろ聞くべきではないかもしれません。

B、それはサッカーが下手な人にサッカーのアドバイスを受けるようなものだからです。

ボールを蹴ろうとしたら、スカッと外れて転んで頭を打って、「サッカーって、なんてひどいスポーツなんだ！」と嘆いている人にサッカーを教えてもらおうとしても、意味がないどころか逆効果ですよ。「こんなスポーツ、やめたほうがいいよ」と言われるのがーでしょう。

僕が怖いと思うのは、「人生は辛いもの」と捉えている大人が世の中のほとんどだということですよ。

ただし、これは、君たちの周りの大人がひどいとか、ダメだという話ではありません。その人たちを責めるのは間違いですよ。

⑥僕が本当に伝えたいのはここからですよ。

▼多くの人が「人生は辛いもの」と捉えているとしたら、世の中には改善の余地がまだたくさん残されている、ということですよ。皆が「人生は楽しい」と思える世の中は素晴らしいと思いますが、改善の余地はあまり残されていないということですよ。

でも、「人生は楽しい」と思う人が全体の2%しかいないのであれば、あと50倍は楽しくできるし、世の中をよくすることができると。それによって、君も、君の周りの人たちも今よりもっと幸せになるはずですよ。

そして、そういう世の中をつくっていくのが君たちであり、また僕なのだと思います。

これもリフレミングですよ。誰かに言われたことをそのまま信じてネガティブになるのではなく、違う角度からいろいろな可能性を考えてみようと言いたいのです。▲

ただし、人は周りの人間や環境によって変わるのも事実ですよ。どんな環境で生きてきたかによって物の見方が大きく変わってくるということですよ。

⑦天才的な理論物理学者のアインシュタインもこう言っています。

「常識とは18歳までに身につけた偏見のコレクションのことをいう」

若い時期にどんな人と過ごし、どんな環境で過ごしたかが、その人の基礎になるのです。

C 僕は、九州の田舎出身で、いわゆる「男尊女卑」が当たり前の環境でした。大人になってから妹に聞いて初めて知ったのですが、実は長男の僕だけおかずが一品多かったそうです。長男だから上座に座らされ、祖母はいつも一番風呂に長男が入れと言っていました。

そんな環境で過ごしてきたので、僕自身にもそれが当たり前という感覚が多少なりともあったかもしれません。ただ、その後アメリカで生活したことで、そうした価値観の違いに気づくことになりました。D アメリカではレディファーストのほうが当たり前なのだと知り、ビックリした経験があります。

人というのは、自分が知らないうちに周囲の価値観に左右されるということですよ。

アインシュタインは、こうも言っています。

「自分を取り巻く社会環境に根ざす価値観、先入観と異なる意見を平然と口にできる人は多くない。大抵の人は、そのような意見を持つことすらできないものだ」

その結果、いつの間にか誰かの言う「人生や世の中は辛いものだ」が、あなた自身に刷り込まれてしまうこともあるかもしれません。特に、10代は自分の土台をつくる大切な時期ですよ。

だからこそ僕は、自分の生きる環境や自分の居場所について、よく考えるべきだと思っています。人は環境に大きく左右されるし、居場所を変えるだけで世界がガラッと変わることもあるからですよ。

(坪田信貴『やりたいことが見つからない君へ』より)

(注) ※「リフレミング」…物事を枠組みを外した視点から見直してみるよ

問一 ———— 線①に関して、「辛いことが多いと思う」人がほとんどであることにに対し、筆者はどのように思っていますか。「経験」という語を用いて、四十字以内で、分かりやすく説明しなさい。

問二 ——線②「下請けのまた孫請けのような形」とありますが、これはどのような状態のことを言っているのですか。次のア、エの中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア 「人生は辛いもの、厳しいもの」という考えが大人から子どもへ、さらにそのまた子どもへと、次々に伝わっていく状態。
イ 「人生は辛いもの、厳しいもの」という考えを幼い時に教えられ、大人になるまで、疑わずにずっと信じている状態。
ウ 大人になるにつれて、「人生は辛いもの、厳しいもの」という考えが、教わらなくても自然と身についていく状態。
エ 多くの大人の中でも親だけが、「人生は辛いもの、厳しいもの」という考えを、小さいころから子どもに教え込む状態。

問三 ——線③『「人生は辛いもの」という情報を君たちに伝えた人たちは、釣った鯛をそのまま食べている『加工の下手な人たち』』について、次の(1)、(2)に答えなさい。

(1)「釣った鯛をそのまま食べている『加工の下手な人たち』』とは比喩表現ですが、どのような人をたとえているのですか。《人生》という言葉を用いて分かりやすく答えなさい。

(2)「加工の下手な人たち」と同じようなたとえとして用いられている人を、本文中より十字以内で抜き出しなさい。

問四

A Dに入る言葉として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア あるいは イ むしろ ウ たとえば エ でも オ なぜなら

問五 ——線④が「言われたとしても、せいぜいそのくらいだろう」という意味になるように 一 に当てはまる慣用句を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 水の泡 イ 鶴の一声 ウ うそも方便 エ 関の山

問六 ——線⑤「その人たち」とはどのような人たちですか、簡潔に答えなさい。

問七 ——線⑥「僕が本当に伝えたいのはここからです」とありますが、筆者はどのようなことを伝えたいのですか。《人生》《世の中》という二語を必ず用いて本文中の▼から▲までの文章をまとめなさい。

問八 ——線⑦「常識とは18歳までに身につけた偏見のコレクションのこと」とありますが、《常識》や《偏見のコレクション》を具体的に言い換えた表現を本文中より二十五字以内で抜き出し、その初めと終わりの三字をそれぞれ答えなさい。(ただし句読点も字数に含むものとします。)

問九 次の文が本文中から抜けています。もどすとしたら、どこにもどすのが適切ですか。もどす場所の直前の五字を抜き出して答えなさい。(ただし、句読点は字数に含みません。)

【つまり、さまざまな手間や工夫で、人生をうまく調理している人です。】

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学五年生の風香は2限目の授業のあと、クラスメイトの溜雨ちゃんとバスケットボールの授業のために体育館に向かって歩いている。その途中、風香は溜雨ちゃんに、「バスケットは本性むき出しでボールを奪い合ったり、足をひっかけたりして怖いから嫌だ」とか、「ドッチボールのほうが、ボールに当たれば外野となり、逃げ回らなくて済むからまだましだ」と話している。以下はそれに続く文章である。

溜雨ちゃんはしゃべらない子だ。

おとなしいとか、シャイとか、そういうレベルをこえてしゃべらない。

わたしは小一からずっとおなじクラスだけど、「はい」と「いいえ」と「うん」と「うーん」以外の溜雨ちゃんの声

をきいたことがない。

小一と小二のときに担任だったハセちゃん先生は、あの手この手で溜雨ちゃんをはげまし、しゃべらせようとがんばった。でも、ハセちゃん先生が一生懸命になればなるほど、溜雨ちゃんも一生懸命しゃべらなくなっていくみたいで、どっちも一步も引かないまままくラスがえの春がきた。

《中略》

いまの五年一組をうけもつ村上先生は、溜雨ちゃんを放っておくっていうよりは、おおらかに見守ってる感じかな。溜雨ちゃんに話しかけたとき、返事がなくてもイラつかないし、しつこくもしない。あるていど待ってから、^①そつと引きさがる。

溜雨ちゃんはただしゃべらないってだけで、勉強の成績は悪くないし、日直や係の仕事もちゃんとする。何を考えているのかわからないけど、何かを考えていそうな節はある。変わった子だけど、めいわくな子ではない。だから、村上先生も、むりやりしゃべらせようとして不登校児とかにするよりは、本人が自然としゃべりだすのを待つことにしたのかもしれない。

「人間には、言いたいことを言う自由もありゃあ、言いたくねえことを言わねえ自由もある」
と、うちのターちゃんも言っていた。

「溜雨ちゃんがこまってるときは、風香がそつと助けてやんな」

わたしが最近よく溜雨ちゃんといっしょにいるのは、でも、ターちゃんからそう言われたからってわけじゃない。

^②もつとシビアで勝手な理由。

ひと月ほどまえ、わたしがかぜで三日間学校を休んでいるあいだに、小五の春からいっしょだった五人グループ（桃香、宮本、あや、エッコ、わたし）が分裂してしまった。

ことの起こりは、リーダー格の桃香と、サブリーダー格の宮本の対立。最初は前髪の長さがどうのつていう他愛のない言いあいだだったのが、ふたりともどんどん熱くなって、引くに引けなくなっちゃったみたい。さらに、あやが桃香に、エッコが宮本についたこととでけんかは泥沼化。やみあがりのわたしが学校へもどったころには、もう修復は絶望的つてところまでこじれていた。

こまったのは、どっちの側にもついていかなかったわたしを、四人がいつせいに「ぜひともうちへ！」と勧誘しはじめたことだ。

「風香はうちの味方だよね。これまでだまってたけど、宮本、かげでよく風香の悪口とか言ってたよ。風香は話が長くて、しつこくて、うざいって」

「桃香たちの言うことなんか信じちゃだめだよ。桃香なんかさ、いつも上から目線で風香のこと、服のセンスが昭和とか、ふでばこがジミとか言ってたし」

「まえに、みんなで風香んちに遊びに行ったじゃん。あの帰りにあやが笑ってた。風香のおじいちゃんウケるって」

「エッコが、風香はガニマタだつて……」

という調子で、わたしを味方につけるため、桃香派も、宮本派も、過去のすみずみまでさかのぼって、力いっぱいおたがいの告げ口をしてくれたのだった。サイアクだ。

^③みんなが力めば力むほど、当然ながら、わたしはぐさぐさ傷ついたし、どっちの味方もしなくなつた。みんながわたしをほしがるのは、ただたんに、人数で勝ちたいからだつて見え見えだったし。もうだれのことにも信じられなくて、人間がしみじみこわくなつた。

考えてみれば、分裂のまえから、わたしにとってあのグループは、あんまり居心地のいい場所じゃなかった。うわべは仲よくしてても、かげでおたがいをバカにしあったり、だれかの小さな失敗をネチネチからかったり、あの四人にはどこか油断ならないところがあつたんだ。

こんなことになつちやつたのは残念だけど、じゃあ、もとへもどりたいのかつていえば、なんだかビミョーなところ。

そこで、かつてないほど真剣に考えて、考えて、考えぬいた結果、わたしは桃香派とも宮本派とも距離をおいて、^④ソロとしてやっていくことを選んだのだった。

とはいっても、ほんとのほんとにひとりぼっちでいられるほどわたしは強くないし、基本おしゃべりなタチだから、話し相手がいなくともつまらない。

そこで溜雨ちゃんに目をつけた。

溜雨ちゃんはしゃべらないけど、人を拒みもしない。しゃべりたいときだけわたしがふらつとそばへ行つても、まえからずつとそばにいたみたいな顔で話をきいてくれる。ほんとにきいているのかはあやしいけど、たまにふうつとほほえんだりもする。そのトゲのないお花みたいな笑顔にいやされる。

もちろん、しゃべらない溜雨ちゃんは人の悪口も言わない。

溜雨ちゃんのそばは平和だ。

^⑤そう、ドッジボールのコートの外みたいに。

わたしの手が一度もボールにふれないままバスケの試合はぶじに終わって、体育のあとの四時限目は、国語の時間だった。

《中略》

村上先生の国語は、ほかの先生とはひと味がう。毎回、教科書に出てくることだけじゃなくて、いろいろな「言葉」をわたした

ちに教えてくれる。

「いろんな言葉と親しんで、その使いかたをふやしていくっていうのは、自分のなかにたくさん種をまくのと似ています。いつか芽が出て、花がさく。みんながこの世界で生きていくための、だいじな糧かてになるよ」

村上先生の言う意味は、わたしにはまだよくわからないけど、自分のなかに種をまくってイメージはおもしろい。この日も、授業の終わりにはいつもの種まきタイムがあった。

「今日のテーマは、形容詞の『美しい』。美しい海とか、美しい馬とか、なんでもいいから『美しい』って形容詞を使える言葉をあげてみてちょうだい。三分間で書けるだけ」

三分はあっという間だ。先生が配った紙にむかって、わたしはさっそくシャープペンをかまえた。五年生になりたてのころは、なかなか言葉がうかばなくておろおろしたけど、今ではすんなり書けるようになった。

これにはちよつとしたコツがある。

美しい空

美しい夕日

美しい星

美しい月

美しい雨

空つながりでそこまで書いて、ん？ と首をひねった。

美しい雨？ 雨が美しいって、アリなのかな。軽く目を閉じて、想像する。町をかすませる雨。霧雨きりこぼみたいなの。うん、きつと美しい。消さずに残すことにした。

美しい森

美しい花

美しい野原

美しい山

美しい川

アウトドアつながりで一気に書いて、またシャープペンを止めた。

美しいタキって書きたいのに、漢字がわからない。ひらがなじゃかっこ悪いな。

時間がないから、あきらめた。

美しい顔

美しい目

美しい耳

やぶれかぶれの顔つながりに入ったところで、時間終了。

「はい、おしまい。みんな、今回はわりといっぱい書けたんじゃない？ どんな言葉が集まったか楽しみだね」

わたしたちが書いた言葉は、先生がぜんぶパソコンにうちこんで印刷し、つぎの国語の時間に配ってくれる。ひとりひとりがまた種を、クラスの全員でわけあうってこと。

「わ、すごい、三十以上も書けてるんじゃない？」

「なにこれ。美しいエリカ、美しいミナミ、美しいハルカ……女の子の名前ばかりじゃない！」

村上先生がみんなに声をかけながら紙を集めているあいだ、わたしはななめ後ろの席にいる瑠雨ちゃんをそつと見た。

瑠雨ちゃんはどうな「美しいもの」を書いたのか。きゆうにむずむず気になって、横目で紙の文字をチラ見し、あつと思った。

そこには、わたしが思いもしなかったものたちがつらなっていた。

美しい音楽

美しい歌

美しい雨の音

美しいメロディ

美しいせせらぎ――

と、そこまで読んだところで、先生の手がその紙を回収した。

見るものをなくしたわたしは、しばらくつくえのシミをながめてから、そつと視線をもちあげた。

⑥ 目が合うと、瑠雨ちゃんはいけないヒミツを見られたような、まつげのゆらしかたをした。

A

。

瑠雨ちゃんの紙にあったのは、ぜんぶが美しいA「だった。

見るものじゃなくて、きくもの。

耳で感じる美しさ。

そんな発想、わたしにはこれっぽっちもなかった。たぶん、瑠雨ちゃん以外、クラスのだれも
A のことなんて思いつかなかっただろう。ってことは……。

瑠雨ちゃんはとくべつな耳をもってるってこと？

意外な発見をしたその日から、^⑦わたしが瑠雨ちゃんを見る目は変わった。

(森絵都『あしたのことば』より)

(注) ※1「ターちゃん」…主人公の祖父

※2「シビア」…非常に厳しいさま、痛烈

問一 ——— 線①「そっと引きさがる」とありますが、村上先生は瑠雨ちゃんに対して、具体的にどのようなようにしたのですか。分かりやすく答えなさい。

問二 ——— 線②「もつとシビアで勝手な理由」とありますが、風花が自分が瑠雨ちゃんという理由を「勝手」だと思うのはどうしてですか、分かりやすく説明しなさい。

問三 ——— 線Ⅰ「他愛のない」、Ⅱ「泥沼化」の意味として最もふさわしいものを、次のア～エの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ「他愛のない」 ア 悪意のない イ とるに足りない

ウ 愛情がない エ 相手のことを思わない

Ⅱ「泥沼化」

ア 周囲に広がってしまうこと イ どうにもできない悪い状況になること

ウ 決着がついたということ エ 一時的に状況が収まりおだやかになること

問四 ——— 線③「みんなが力めば力むほど、当然ながら、わたしはぐさぐさ傷ついた」とありますが、それはどうしてですか。分かりやすく説明しなさい。

問五 ——— 線④「ソロとしてやっていくことを選んだ」とありますが、具体的にどうしたのですか。分かりやすく答えなさい。

問六 ——— 線⑤「ドッジボールのコートの外みたいに」とありますが、どうして瑠雨ちゃんのそばはドッジボールのコートの外みたいに平和のですか。分かりやすく説明しなさい。

問七 ——— 線⑥「目が合うと、瑠雨ちゃんはいけないヒミツを見られたような、まつげのゆらしかたをした」とありますが、このときの瑠雨ちゃんの気持ちとして最もふさわしいものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 知られたくない自分の特別な能力がばれてしまったと思い、それをどう隠そうかと悩んでいる。

イ 自分がひそかに心に感じていた特別な美しいものを知られてしまったと思い、動揺している。

ウ 「わたし」が勝手に課題プリントをのぞいたので、まねされるのではないかと不安になっている。

エ 自分の考えと「わたし」の考えが全然違ったので、答えを間違ってしまったと思っ焦っている。

問八 ——— A には全て同じ言葉が入ります。漢字一文字で答えなさい。

問九 ——— 線⑦「わたしが瑠雨ちゃんを見る目は変わった」とありますが、どのように変わったのですか。変わる前と後を比較して説明しなさい。

問十 (1) 5 ページの二から三行目の ——— 線で、村上先生は《いろいろな言葉と親しんで、その使い方をふやしていくことは、この世界で生きていくための、だいじな糧になる》と言っています。あなたは、言葉と親しみ、使い方を増やしていくことは、将来どのような良いことにつながると思いますか。あなたの考えを書きなさい。

(2) 「美しい」という形容詞のあとに、何か言葉を続けるとしたら、あなたはどのように答えますか。本文にあげられている言葉以外で考えて、二つ書きなさい。